

令和元年6月10日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02085

研究課題名(和文) 『百科全書』にみる科学の歴史と進歩の哲学：そのイデオロギーと読者戦略

研究課題名(英文) History of Science and Philosophy of Progress in the Encyclopedie : study on its ideology and reader strategies

研究代表者

井田 尚 (Ida, Hisashi)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：10339517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、科学アカデミー終身書記フォントネルが物故会員に捧げた称賛演説などに反映された進歩史的な科学観を皮切りに『百科全書』における科学の歴史の叙述の分析に取り組むとともに、『百科全書』が掲げた進歩の哲学の党派的言説をテキストのレベルで支える具体的な読者戦略の解明にも取り組んだ。

その結果、ディドロが執筆したとされる無署名項目の典拠と著者の同定に成功した。さらに、ディドロが執筆した哲学史項目群も、古代異教徒の諸国民の宗教や古今の哲学者の思想の歴史を淡々と紹介するかに見えて、『百科全書』の進歩の哲学と周到なテキスト戦略に裏打ちされた啓蒙主義的な言説として構築されていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、伝統批判と学問知の再編成によって近代的な世界観への転換を促した『百科全書』の諸項目で叙述されている科学と哲学の歴史において、一見客観的な辞書の項目の装いの下に、進歩の哲学という百科全書派に通底する党派的な価値観への賛同を読者公衆から獲得することを目的としたテキスト戦略がいかに周到に張り巡らされているかを明らかにできた。

現代民主主義社会では普遍的な理念とされている啓蒙思想を『百科全書』という書物の具体的な記述を通じて捉え直すことで、検閲や敵対勢力の反応を意識しつつ読者公衆の支持の獲得を目指すイデオロギー的言説としての啓蒙思想のテキスト戦略の諸相に光を当てた意義は大きい。

研究成果の概要(英文)： This study, starting from analysing the progressivist historical view held by Fontenelle in his eulogies dedicated to deceased members of the Academy of Science, has focused on an ideological analysis of the narrative of the history of science in the Encyclopedie. It has also tried to elucidate specific reader strategies that support the Encyclopedie's partisan discourse. As a result, it has helped to identify some implicit authors of the citations in Diderot's unsigned articles. In addition, it has demonstrated that the seemingly monotonous religious history of ancient pagan nations and the philosophical history of ancient and modern philosophers, written by Diderot in his articles on the history of philosophy, were carefully and strategically constructed by the author as an enlightened discourse.

研究分野：十八世紀フランス思想

キーワード：百科全書 科学史 哲学史 進歩 ディドロ イデオロギー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

コンドルセの『人間精神進歩史』によって総括された啓蒙思想をルーツとし、十九世紀のダーウィンやラマルクの生物学的な進化論、スペンサーの社会進化論によって強化された近代進歩史観を特徴付ける直線的な時間意識は、近代科学史や思想史のみならず、二十世紀の戦後から1960年代に至る啓蒙思想研究、『百科全書』研究においても、半ば自明の前提とされてきた。ソビエト連邦および共産圏諸国が健在であった戦前・戦後から1960年代にかけて、十八世紀研究の領域においても世界的に大きな影響力を振るったマルクス＝レーニン主義の唯物史観、すなわち歴史法則に従って進歩の途上にある人間社会は、やがて資本主義を乗り越え、共産主義という最終段階に達することになるといふ、いわゆる進歩史観もそのひとつの背景となった。

『百科全書』研究の草分けのジャック・ブルーストは、主著『ディドロと百科全書』(*Diderot et l'Encyclopédie*, 1762)において、人間精神による学芸の進歩の歴史を、一方では人間精神の姿をその起源にまで遡って理解するのに欠かせない、過去に対する時間的な距離化、他方では啓蒙の哲学が同時代の支配的文化との闘いの中で、後世の読者に向けて現在における人間精神の変革を擁護する上で論理的に要請される現在と未来の連続性(未来に向けて開かれた歴史的展望)として定義することで、進歩の観念の二面性を明るみに出した。

また、十八世紀研究者ジャン＝マリ・グールモは、『歴史の治世：十七世紀から十八世紀における歴史的言説と変転』(*Le Règne de l'histoire: Discours historique et révolutions, XVII^e-XVIII^e siècles*, 1996)において、知識の漸進的・単線的な発展を示す『百科全書』「序論」(ダランベール執筆)の人間知識の系譜学と、『百科全書』の様々な学芸分野の項目で叙述される学問の実際の歴史が示す一進一退ぶりと乖離を指摘し、『百科全書』は結局のところ、歴史を過去の文明の記憶だけに制限し、過去から現在を経て未来へとつながる人間精神の単一的な進歩の歴史の叙述を断念したのだと述べている。

進歩の観念を紆余曲折に満ちた現実の学問の断続的な発展の歴史から切り離し、啓蒙主義陣営の党派的な価値観として分析するこうした研究を受け、科学の歴史的進歩を説く『百科全書』の項目を、同時代および未来の読者の獲得を目指した党派的な勧誘の言説として言語行為的な視点から分析する試みは、啓蒙思想研究および科学史に一石を投じることになるものと思われる。

2. 研究の目的

本研究は、それぞれの時代において科学的真理を塗り替えた大発見や支配的な理論を時系列に沿って並べ、単線的に記述する傾向が強い近代科学史で常識とされてきた進歩史観の淵源を問い直す作業の一環として、ディドロやダランベールら『百科全書』(1751-1772)の執筆陣が、過去が示す人間知識の発展と停滞のサイクルを歴史的な宿命として受け容れながらも、啓蒙の哲学を主導する立場から科学の歴史的進歩という極めて党派的な価値観に自陣営の命運を賭し、イデオロギー的・論争的な言説によって読者の支持を獲得しようとした読者戦略を、文献学的な手法も用いた『百科全書』の本文テキストの具体的な分析を通じて解明することを目的とする。

3. 研究の方法

『百科全書』の科学項目に見られる諸科学の歴史と進歩の観念の関係は多岐にわたるため、本研究は、(A)から(D)の4段階に分けて実施した。1年目は、(A)新旧論争と科学的進歩のイデオロギーの分析、2年目は、(B)『百科全書』と科学の歴史化(「完成」から「進歩」へ)についての分析、3年目は、(C)『百科全書』の科学項目における学説史と進歩史観の分析、および(D)『百科全書』の科学の歴史と読者の教育の分析にそれぞれ当てた。なお、4年目は、(A)～(D)の成果を踏まえ、『百科全書』の科学項目に見られる諸科学の歴史を啓蒙主義の進歩の哲学を反映した党派的・イデオロギー的な歴史叙述として捉え直すとともに、進歩を唱えた『百科全書』の科学項目の言説の構造を、一般読者の支持の獲得を目指したテキスト戦略の側面から解明するまとめの作業に当てた。

4. 研究成果

(1)本研究では、まず、パリ王立科学アカデミー終身書記を1697年から40年近くにわたって務めるとともに、古代人(ギリシア人、ローマ人)と近代人(フランス人などヨーロッパの諸国民)の文化的優劣を競ういわゆる「古代人近代人論争」(「新旧論争」)で進歩派のリーダーとして論陣を張り、フランス啓蒙の初期から全盛期の生き証人となった思想家・科学者フォントネルが科学啓蒙に果たした役割に注目した。フォントネルは、コペルニクスの地動説など当時最新の天文学的知識や哲学的仮説としての渦動説に基づいたデカルトの宇宙論などを、社交人の男女の対話という設定で説いた科学啓蒙書『世界の複数性に関する対話』(1686年)を敢行し、同書は科学関連著作としては異例のベストセラーとなった。同書の人気は、男女の夜話という洒落た設定もさることながら、天体を金髪や栗毛の美女に準えるといった魅力的な文学的比喩の数々による面も大きかった。ところが、科学的パラダイムとして前世紀のデカルト哲学に取って代わりつつあったニュートン物理学の入門書『ニュートン哲学要綱』(1738年)を自ら執筆し、フランスにおけるニュートン主義の普及にも多大な貢献を果たした作家・思想家

ヴォルテールは、シリウス星人の巨人による宇宙旅行と地球探訪をテーマとした哲学的コント『ミクロメガス』において、『世界の複数性に関する対話』におけるフォントネルの比喩をパロディー化し、自然をありのままに描かず文学的修辭で飾り立てるフォントネルの文体の滑稽さを揶揄している。フォントネルによる比喩の多用は、科学の専門知識を持たない当時の社交界の紳士淑女に天文学の基礎知識をわかりやすく説くことを主たる狙いとした、娯楽性への配慮に発するものである。だが、ヴォルテールが『ミクロメガス』でデカルトの渦動説ではなくニュートンの万有引力説に軍配を上げている哲学的・科学的根拠を問うことで、ことによると科学理論を象徴するキーワードないし中心概念そのものが、しばしば比喩に寄り掛かっているのではないかと、との新たな問題意識が浮上した。そこで、フォントネルが支持したデカルト哲学の「渦動」の概念を手始めに、機械論医学において身体という機械の原動力を説明する比喩的イメージとして用いられた「発条(バネ)」の概念、医科学派が生体の生理現象の原理として仮定した「発酵」の概念などを比喩という視点から分析し、啓蒙期の科学的概念、中でも証明が極めて困難な生命原理そのものをモデル化しようとする理論的説明が往々にしてアナロジーの誘惑に陥りがちであったこと、そして、その点にこそ、理性の領分である科学理論と想像力の領分である文学の相互浸透の接点が見られることを明らかにできた。

(2) 次に、フォントネルが終身書記の職務として長年にわたって執筆を担当した『パリ王立科学アカデミー年誌』の序文や科学アカデミーの物故会員に捧げた称賛演説(追悼演説)に、近代派フォントネルの進歩史的な科学観がどのように反映されているのか、また、『百科全書』の様々な科学項目において叙述される科学の歴史に啓蒙思想の進歩のイデオロギーがどのように反映されているかを検証する作業に取り組んだ。その結果、フォントネルが、古代ローマのポリュビオスによる政体循環史観(政体は、君主制 専制 貴族制 寡頭制 民主制 衆愚制 君主制の順に循環を繰り返すという歴史観)などにルーツを持つ循環的・円環的な時間意識と訣別して近代的かつ直線的な時間性に基づく科学の進歩史を構想し、科学アカデミーの新旧メンバーをはじめとする同時代の科学者による偉大な功績の数々を、近代に果たされた科学の長足の進歩の証拠として称賛していたこと、学問的分類の人為的性格や現状における科学的認識の限界を弁えていたフォントネルが、同時代の科学をいわば科学的真理が見出されるまで過渡的な役割を担う「暫定科学」と位置づけ、しばしば無根拠な形而上学的原理に陥りがちな体系的理論の構築を焦ることなく、膨大な数の観察や実験によって発見や事実を蓄積することが科学の歴史的進歩をもたらすとの謙虚な信念を抱いていたこと、パリ王立科学アカデミーという紛れもない公的学術機関の代表者であったフォントネルの進歩主義的な科学観が、庇護者でもある王権への配慮や科学アカデミー会員の精神的共同体への信頼といった不可避的な利害打算やイデオロギー的傾向を伴っていたことを確認できた。中でも、フォントネルの主要著作の中でも論じられる機会が比較的少ない科学アカデミーの物故会員の追悼演説のディスコース分析を通じて、フォントネルの進歩主義的な科学観のイデオロギー的性格を文言レベルで具体的に浮き彫りにできたこと、また、科学アカデミーの物故会員の功績を称えるフォントネルの追悼演説が、科学者の個人的功績の進歩史的な記述という点において、近現代の科学史の歴史叙述の雛形とも言うべき言説的特徴を示していることを明らかにできたことは、大変に意義深い。

続いて、ディドロ、ダランベールらが『百科全書』で掲げた「進歩の哲学」の党派的な言説を様々な項目の本文テキストの記述のレベルで支える具体的な読者戦略の解明にも取り組んだ。

(3) この作業の一環として、ダランベールが『百科全書』の数学・物理学項目を執筆する際に、英国のエフライム・チェンバースによる百科事典『サイクロペディア』やミュッセンブルークによる物理学入門書など参考文献からの引用をいわば「コピー&ペースト」の手法で加工・再利用する一方で、自らが支持するニュートン主義などの学説に関しては、項目「引力」をはじめとする様々な項目で積極的に介入して個人的なコメントを加えていることを引用・加筆部分の特定作業によって明らかにし、その成果を、日本の『百科全書』・啓蒙研究会およびフランスの『百科全書』研究グループのメンバーによる国際的な共著として世に問うことができた。

また、ディドロが執筆したとされる『百科全書』項目「無知」など複数の無署名項目の執筆者を割り出す認定作業にも取り組んだ。具体的には、それらの項目の本文テキストを構成する非明示的な引用(著者名、書名などの出典情報を伴わない無断の引用)の存在を突き止め、典拠となった文献を絞り込むことで、それらの項目がディドロによる真筆である可能性が高いとの大家達による経験的な認定を補強する更なる物証を文献学的手法で示すことに一定の成果を収めた。『百科全書』におけるディドロの無署名項目の認定・特定作業は国内外において、未だに残された難題であり、草稿が残されていない上に文体レベルで個人を特定する方法が確立されていないなど数々の方法的困難が立ちはだかる中で、典拠研究を応用した文献学的手法によって執筆者を認定・特定する可能性をささやかながら具体的に実証できたことの意義は大きい。

(4) さらに、『百科全書』の共同編纂者を務めたディドロ自らが、ドイツのヤーコブ・ブルッカーによるラテン語著作『批判的哲学史』(1742-44年)からのフランス語への翻案に基づいて

執筆した「古今の哲学の歴史」と呼ばれる哲学史関連の項目群の分析に取り組んだ。その結果、それらの項目が、一見、『百科全書』が編纂・刊行された十八世紀当時のフランスのキリスト教社会と無縁な古代異教世界の諸国民の宗教や古今の哲学者の思想体系の歴史を淡々と紹介するかに見えて、百科全書派が共有する「進歩の哲学」と、検閲を意識したほのめかしや参照指示などを駆使した周到なテキスト戦略とに裏打ちされた批判的言説として構築されていることを明らかにすることができた。中でも、中世スコラ学の伝統を受けて長らく学問の世界を支配したアリストテレス哲学を紹介した項目「アリストテレス主義」(『百科全書』第1巻)から同項目の補遺としてディドロ自らが執筆した項目「逍遥学派哲学」および参照指示先の項目「哲学者」(いずれも『百科全書』第12巻)へと読み進めるにつれ、カトリック・キリスト教会の公認哲学として権威をなす一方で、抽象的な形而上学的概念の分類に拘泥し、自然そのものの研究に裏付けられた科学と哲学の進歩を停滞させたアリストテレス主義の弊害に対する啓蒙主義的な批判の度合いが強まる傾向を、『百科全書』の項目間の参照ネットワークを巧みに利用したアリストテレス主義に対する分散的批判として可視的な形で論証できた意義は大きい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4件)

- (1) 井田 尚、「『百科全書』の項目「アリストテレス主義」「逍遥学派哲学」「哲学」の参照指示ネットワークと分散化されたアリストテレス主義批判」、青山学院大学文学部『紀要』、査読無、60号、2019年、pp. 119-140.
- (2) 井田 尚、「『百科全書』の無署名項目 IGNORANCE の引用群とディドロの痕跡」、『青山フランス文学論集』、査読無、復刊26号、2018年、pp. 68-88.
- (3) 井田 尚、「フォントネルによる科学の進歩史とそのイデオロギー的言説」、青山学院大学文学部『紀要』、査読無、58号、2017年、pp. 103-123.
- (4) 井田 尚、「啓蒙の科学あるいは隠喩の思考：フォントネル『世界の複数性に関する対話』と十八世紀の科学理論」、青山学院大学文学部『紀要』、査読無、57号、2016年、pp. 91-110.

〔図書〕(計 1件)

・逸見龍生、小関武史編、共著(マリ・レカ=ツィオミス、オリヴィエ・フェレ、フランソワ・ペパン、逸見龍生、小関武史、井田尚、イレーヌ・パスロン、アレクサンドル・ギルボー、小嶋竜寿、寺田元一、井上櫻子、川村文重、飯田賢穂、淵田仁)、『百科全書の時空 典拠・生成・転位』、法政大学出版局、2018年、406頁(pp. 137-168、第6章「『百科全書』の制作工程 グランベールと引用の系譜学」を担当)。

〔その他〕

ホームページ等

青山学院大学研究者情報(文学部フランス文学科)

<https://raweb1.jm.aoyama.ac.jp/aguhp/KgApp?courc=60104>

AURORA-IR 学術リポジトリ(紀要・論文検索)

<https://www.agul.in.aoyama.ac.jp/repo/repository/1000/?lang=0>

6. 研究組織

(1)研究代表者

研究代表者氏名：井田 尚

ローマ字氏名：Ida, Hisashi

所属研究機関名：青山学院大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：10339517

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。